新年あけましておめでとうございます

2015年

若さもいいが
老いもいい
朝陽もいいが
夕陽もいい

正月は
家族で近くに
集まって
元気な顔を
確かめ合おう

わきみず

正月号

発行所　普門山　林泉寺
三戸町斗内字寺牛25
〇一七九
二五―二八五〇
啓誠

皆様おすこやかに新春をお迎えのことと存じます。年末年始、「日本列島は雪で大荒れ」という予報でしたが、檀家の皆様の念力により、穏やかな正月を迎えることができました。

平成二十七年の幕開けです。

去年は良くなかったという人、普通だったという人、ものすごく良かったという人、身内を亡くされた人、家族が増えたという人、一年が長かったという人、あっという間の一年だったという人・・・等々も、皆さん平等に平成二十七年がやってまいりました。スタートは一緒ですが、この後、メイメイが、３６５日をいかに使うか、いかに生きるかです。

仏教は、「無常」を説きます。一分一秒、寝てても、ボーッとしてても、時は進みます。過去には囚われず、前へ前へと進みたいものです。

羊はいつも単独では行動せず群れで行動します。これが寺檀一如です。

檀家の皆様のご協力を頂いて、益々精進し、当寺発展の為尽くして参りたいと思います。

副住職　拓郎、寺族　絹子共々
今年もよろしくお願い申し上げます。

曹洞宗　普門山　林泉寺
住職　飯原　啓誠　合掌

「焼香の作法」

シリーズで、お経・偈文（げもん）などの意味を少しずつ解説してきました。

前回迄は難しい話だったかと思いますので、今回は、現実的な「焼香の作法」をお話ししたいと思います。

暑い地方では悪臭が身体や周辺一帯から発散し、臭気のため悩まされることがあります。そこで薫り高い香をたき、或いは身体に塗って悪臭を除き、爽快な気分を与える必要がありました。

インドでは香は、仏教以前から生活の必需品として愛用されていて、釈尊在世の時、仏教に取り入れられ、仏教の発展と共に次第に意義づけられ、最高の供養品として尊重されるようになったのです。

焼香は心と身体の穢れを取り除き、清浄な心でお参りする時の作法です。

まず、坐礼の場合、自分の順番が来たら、次席の人に「お先に」というように軽く会釈してから壇前に歩み寄り、壇の三歩ほど手前で座って遺族と僧侶に一礼して座布団に正座します。

壇の正面の遺影と位牌を仰ぎ見て、数珠を持参したなら左手に掛けて合掌し一礼します。焼香の回数は、三回するという場合、「仏・法・僧」の三宝に捧げるという説、又（もしくは）、三毒の煩悩（貪り、いかり、愚痴）を一つずつなくすとう説があります。

曹洞宗では、まず香を右手三指（親指・人差し指・中指）でつまみ、左手は右手を軽く支えて額の辺りに軽くおしいただき焼香、次に香をおしいただかないで焼香します。左手は片手合掌が良いでしょう。

初めに焚く香を主香、次に焚く香を従香といいます。

そして、都合二回香を焚く訳です。（主香は初香ともいう）「初香は拈ぜず」とされ、従香は拈ぜずとされています。初香は沈香で燃えにくいので燃えやすい抹香を添香とする伝統からきたものです。「焼香はもともとは香で死体の匂いを消したものですから、焼香を三回もすると、亡くなった人に「おまえくさいぞ」と言っていることになる」という意見もありました。意見の是非はともかく原則は二回であっても大勢の会葬者、弔問者がいる時は一回にするほうがよいでしょう。当寺では供養の際一回でお願いしています。（三戸斎場では、一つまみ一回と張り紙をしている。）

その焼香の煙と香りはすべてにゆきわたって、その部屋もお参りする人の心も皆清浄に清めて、み仏の御徳が無限に広がって、一切に及びます。自分のお香を持参する場合は、少しこだわってはいかがでしょうか。

焼香が終わったら、祭壇に一礼して座布団より下りて三歩ほど下がり僧侶・遺族に目礼して自分の席に戻ります。注意すべきは、仏前の座布団に座ったままで、遺族と僧侶に一礼をしないことです。又、座布団をよけて座作法もありますが前記事項に気をつければ通常はその必要はないでしょう。

以上が座礼の焼香作法ですが、立ち焼香の場合も座布団に座る作法以外は同じです。

告別式や葬儀、大法要等、限られた時間内に大勢の人が焼香する場合、ややもすれば単なる習慣的、儀礼的な心のこもらない焼香になりがちになるかと思いますが、これでは仏さんにも通じないし、自分の心の浄化にもなりません。焼香の意義をよく弁え、気持ちのこもったお焼香をしたいものです。

「焼香の偈」

戒香定香解脱香
（かいこうじょうこうげだっこう）
光明雲台遍法界
（こうみょううんたいへんほっかい）
供養十方無量仏法僧
（くようじっぽうむりょうぶっぽうそう）
見聞普薫証寂滅
（けんもんふくんしょうじゃくめつ）

編集後記

春のない冬はないというけれど
この冬の厳しさを
しっかり受け止めて
春を待ちたい

近年、春夏秋冬の境目がボンヤリしてきているように思われます。今までの考えでは災害も起こるようなことはないと思えます。自分の身は自分で守りましょう。

小坊

むがし話っこ

ーえん子角良ー

待ち焦がれるえん子・・・

前回からの続きです。

「まさか」と思いながら、角良の下で、二人で楽しく語り合った事や、元気に手をふって、でかけていった与市の姿を思い浮かべながら、ションボリと立って、涙を流しているえん子の姿が、うすい月の光の中に見えました。父や母も、こうした、えん子の姿を見ると「与市ぁ、もう帰らねがも知らぁね、よその方でぁ、もっとくらしぁ楽だずぅ話だ」と夫婦で話しながら、「えん子、与市ぁいつ頃もどってくるだがなぁ、はやぐくればえぇのに」えん子には、父や母の心配もよくわかりました。それで自分のさびしい気持ちをかくして明るく、元気そうに、立ち振る舞いををするのです。「うん、もうすぐ来るごった、金あんまりいっぱぇぁもって、あるげなぇでらべおん」心にもない冗談で、父や母を引き立てようとするえん子、それを見て、父や母はまたあわれに思うのでした。二年も過ぎて、三年も半ばすぎようとしているのに、与市は帰って来ませんでした。そのころ、えん子の所へ、隣村の裕福な農家から、「えん子を嫁に」と言って来ました。両親は、三年にもなっているのに、帰って来ない与市を半ばあきらめ、怒っていました。それでちょうどよいと、えん子に、この話をしました。えん子は、勿論承知しません。「与市さんがきっと帰って来るしけぁ、もう少しまってけで」と両親にたのみました。それからは、えん子が角良の上に立って、遠くまで見ようとするようにして、与市の帰りをまちました。だが与市の姿は見えません。えん子の胸は、つぶれそうです。「与市さん、なぜ帰らないの」「与市さんは、斗内のくらしより、よその国のくらしがよくなったの。」「だったら、えん子もつれていってぇ」涙を流し、身をもだえながら、ひとり北の空を見ながらうったえつづけます。だが与市は帰って来ません。その筈です。働きすぎた与市は、今は病の床について、斗内やえん子の事を思い続けていました。与市は、まじめで、働き者だったので、親方衆から「ここにとどまるように」と、すすめられました。また一家の娘のむこに」と言う人も在りました。しかし与市は、ただひとすじに、斗内に帰って、えん子といっしょに暮らすことだけを考えて働き続けたのです。働いても、働いても楽にならない百姓でしたが、与市は、えん子と暮らすことをただ一つの希望に働いていたのでしたが、好事魔多しのたとえ通り、三年目にかかって、ようやく思ったぐらいの金を手にして帰ろうとする矢先、フトした風邪がもとで病の床についたのですが、働き過ぎもあったのでしょう。中々立ち直れずにいるのでした。えん子は、そんなことを知るわけはありません。毎夜のように角良で、与市の帰りを待っています。両親は、もう与市をあきらめて、隣村へ嫁にやることをきめて、準備をはじめています。そして、えん子に「はやく心を決めなさい」とせめるのです。やがて、盆おどりの太鼓が風にのって、聞こえて来るようになりました。「盆までには、きっと帰って来る」とえん子は、ひとりでに決めてまちつづけていました。どんなに貧しい百姓でも、お盆にだけはなんとなく、はなやいだ気持ちで、いそいそと老いも若いものも寺の境内に出かけていくのです。「えん子、おどりっこさ、いがねがぁ」友だちがさそってくれます。隣村の旦那のむすこが来ているかも知れないので、両親もしきりにすすめます。えん子は、「うん、いまいぐしけぁ、さきにいてけろ。」と、じっと考えているのです。やがて心をきめたのでしょう。「とっちゃ、かっちゃ、いってくる。あとばよろしく、いつまでもげんきでな」えん子は、寺の境内に向かうのでなく、角良の上に急ぎました。角良の上に立ったえん子は、「とっちゃ、かっちゃゆるしてけろ、わ、とても生ぎでいる気がしなぇぁ、魂こにでもなって、与市さどごさいぐねぇ」こうして、十六夜の月の夜、角良から熊原川の急流に身をおどらせました。それから月のおぼろの夜は、角良の上にえん子の姿が見られるようになったと言います。そして、村の人々は、いつとはなしに、えん子角良と呼ぶようになりました。与市はとうとう帰ってきませんでした。風の便りでは、与市も病から立ち直れないでえん子のあとを追うように、あの世へ旅立っていったということです。

どっとはらい

何とも切ない話です。昔の農業をやっていた人々の苦しさを語ったものと思います。

ガーリッククイーン来山

アメリカ　ギルロイ市より

ー第29回にんにくとべごまつりー

平成26年10月4・5日、田子町で開催の「第29回にんにくとべごまつり」へ姉妹都市であるアメリカのギルロイ市より、ギルロイガーリッククイーンの、ブリトニー・スーザさんが来町しました。

その際、日本の文化にも触れたいという事で、10月6日帰国前日、田子町役場にお勤めの檀家さんで、富岡信雄さんの案内により、最初、本尊上供のお勤めをし焼香、坐禅体験、伽藍の説明、寺のしくみ、役割、教え等、約2時間にわたり説明いたしました。

後日、「思い出をありがとう」というお礼のメッセージが届きました。　又の来山を・・。

帰りに　全員揃って記念写真

問答
流暢な？英語で解答

坐禅体験
あぐらの習慣が無い為ー苦労

「新春祈祷会」

初めてのご祈祷

平成二十七年元旦

天気予報では、年末年始は全国的に雪で大荒れとの予報でしたが、私がこの寺に就いてから最初の「新春祈祷会」を穏やかに迎えられた事は、大変ありがたいことだと思います。二回とも40～50人の方々においで頂きました。

一年の平穏無事を念ずるとき、それだけでも、すがすがしくなれたかと思います。

所縁如意吉祥ならん事を。

午前零時のご祈祷法要

午前零時のご祈祷法要

午前九時のご祈祷法要

午前九時のご祈祷法要

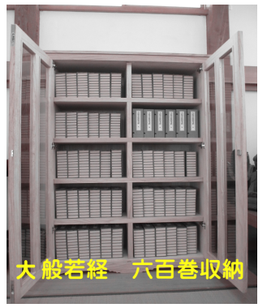
念願の大般若経収納庫

平成二十四年晋山の時に購入させて頂いた、大般若経六百巻。納める所が無く、湿気、埃等に心配しておりましたが、篤志者、下平の中平三郎さん、下田子の橋本靜一さんのご寄付により、収納庫を購入致しました。

お二人には、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

誠にありがとうございました。

総桐製
湿気対策には万全


大般若経　六百巻収納